昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十一年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第二十八巻　第一号　（通第三一九号）

63.8.19

目次

信仰の偉力……近角常観……(2)
苦悩の救済……白井成允……(7)
慈母の念力(三)……高千穂徹乗……(12)
念仏詩抄……木村無相……(16)
いのち尊し……花田正夫……(19)

一枚起請文

もろこし我が朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず。
また学文をして念のこころをさとりて申す念仏にもあらず。
ただ「往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑ひなく往生するぞ」と思いとりて申すほかには別の仔細候わず、ただし三心、四修と申すことの候は、皆決定して「南無阿弥陀仏にて往生するぞ」と思う中にこもり候なり。
この外に奥深きことを存ぜば、二尊のあわれみにはずれ本願にもれ候べし。
念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じて、知者の振舞をせずして、ただ一向に念仏すべし。

歎異鈔二章

親鸞におきては「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。
念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべらんまた地獄に堕つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄に堕ちたりともさらに後悔すべからず候。その故は自余の行を励みても仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にも堕ちて候わばこそすかされたてまつりてという後悔も候わめ、いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし云々。
弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおわしまさば善導の御釈虚言したまうべからず、善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや、法然の仰せまことならば親鸞が申す旨またもてむなしかるべからず候か。
詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうえは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々のおんはからいなりと、云々。

× × × ×

信仰の偉力

近角常観

偉力とは威神力、加威力（かびりき）ということで、他力信仰には非常な積極的な偉大な力のあることをお話したいと思うのであります。他力信仰には極端にいわば事実上に力があらわれていぬように自分にも思い、他からもそう見えるようで、消極的な、心淋しいものであるかの如く思われる。けれども実は他力信仰には積極的な偉力のあるということをお話しょうと思う。
事実問題について話すこととすると、多年私の処へ法話を聞きに来ていられた方で、一人息子が昨年九月以来腹膜炎にかかられて、治療しても到底回復の見込みがたたなくなった。それで佐藤博士が外科で切開して見られたらどうかとすすめられて、いよいよ大手術を行うということになった。それで私は一昨日見舞に病院に参りましたが、私の考えでは、現に知人で切開のためにそのままに死んだ人もあることだから、なるべくなら止めさせよう位に考えていたところが、いよいよ会ってみると切開して頂くことに決心したとのことで、私は驚いたのであります。
親一人子一人の方であるが、お話をきくと「捨てておいてはどうしてもいけないので、それで佐藤先生に聞くと、一つ切開してみたらどうかとのお話でした。勿論切開した結果、それがはたして善いか悪いかはわからないのでありますけれど、どうせ死ぬのなら親として、まのあたりいのちの縮まるのを座視するにはしのびないし、又手術したらどうかと勧めて下さるのは、いずれ何か信ずるところがあればこそ言われるのでしょうから、死なうと生きようと結果をかえりみずに、すべてお医者様におまかせして、切開していただくことにきめました」とのことで、子息様もやはり同じように決心をきめていなさるとのことでした。私はこの信仰の態度の実に立派なのにすくなからず敬服したのであります。何もかも医師に打ちまかせて、結果の如何をかえりみぬというのは、真実の信仰の態度に相違ない。それで今朝も病院へ聞きあわせてみると、経過はよいとの

ことであった。信仰の偉力ということをつくずくと感じたのであります。

信仰の偉力とは、死んでもかまわないというのではない。死なうが、生きようが、どうなるとしても、すべて偉大なる如来のお力に信頼して生活することである。こう云えば、むやみに強がっていうように聞えるが、そんなものなら一時のつけ元気で、あまり著しい偉力とはいわれない。病気が治るも癒らぬも、私の一身がどうなるかも、すべてを明らかにしろしめす偉大なる如来を信じたならば、こういうどうもこうもいたしようのない者をおたすけ下さるという如来のやるせなき御真実を聞いて、そのままに打ちまかせたところが信仰の偉力であります。どうもこうもすることの出来ないという消極的な方面に対して、かかる積極的な力をもって向わるるから、信仰の偉力が生ずるのである。

他力の信仰のいただきように「悪いままにおたすけだ」というのと「このままのおたすけだ」というのと二つに分れた聞きよう、勧めようがあるように思われる。これは一面はその通りにちがいない。自分で清らかにし、立派になってたすかるのでないから、全くその言葉の通りであります。しかし、悪いものが悪いままにたすかるというはずはない。何故に私共がすくわれるのかといわば、かかる消極的なものに対して、いかに消極的であっても、罪悪深くとも、煩悩多くとも、消極的であればあるだけ、罪悪が深ければ深いだけ、煩悩が多ければ多いだけ、それだけ益々真実の偉大なる力が加わって下さるから、それでたすかるのである。苦しみがあればあるだけ大なる恵みをもって向わるる故にたすかるのであります。

「悪いままのおたすけ」ということに対して私が非難すると、多くの僧侶は非常にこれに反対されるので「それではよいことをせよというのか、それなら真宗でない」という。けれども、彼等の言葉によると、悪いまま、罪のまま、そのままがおたすけだとより聞こえない。他力とはそういうような意味ではない。いかにまことならざるものにも、罪悪ふかきものにも、どこどこまでも見捨てぬという如来の無限の同情慈悲まことがなければ、私共のたすかりこはないのである。

然るに今までの他力の教えが軽くなっているように思われるのであります。したがって一向に、生活上にも道徳上にも、何等積極的な力もあらわれずに、浅ましきままに、そのままに生活しているように思われる。

さればとて、それでは、よくせよという事だなとおもうと大なるあやまりである。それほどに罪の深く浅間しいものをあわれむ如来のご真実に対しては、わが身がどうなろうとか、こうなろうと、すべてを如来にうちまかせる、これが他力信仰の偉大なる力である。

「かかるものをおたすけ」というても、自分が真に罪悪もなしに、かかるものということは云えないはずである。もし他力真宗の味いが真に徹底したならば、もっと、道徳上に、社会生活上に、信仰の偉力が起らねばならぬ。これは「悪いまま」とか「このまま」とかいうのみで、これほどに悪く、罪深いものを捨てたまわぬという広大な恵みを感じたならば、もしめぐみのもとに安んじていたならば、もっと大なる偉力、権威があらわれねばならぬのであります。如来のお慈悲の力強いことをとくのに、どこどこまでもみすてたまわぬ如来のお慈悲をいただくということを忘れて、わるいままということばかりがあとにのこるようであってはならぬ。

又このままというのも、実に信仰の徹底せるところに相違なけれども、如来の無限の同情の聞えた時に、ああわるかったとなるので、浅ましい汚れたものに対して、十二分のお慈悲で向われるのがわかった時、はじめて我身の罪悪の深いことがわかるのであります。しかるにいろいろの多くの誤解があって、信仰の偉力がその人に加わってないのであります。

歎異抄の第十六章にこう示されてあります。それをわかり易く話してみると「信心の行者が、自然に腹を立てたり、罪悪を犯したり、同朋同侶と喧嘩口論をした場合には、必ず廻心（懺悔）をせよということをいうが、これは悪を断ち善を修めるという心持であろうか。しかしながら、一心一向に弥陀をたのむ人においては、廻心ということは、ただ一度あるだけである。この一度だけある廻心とは、常日頃は本願他力を知らなかった人が、弥陀の智慧の光明に照されてみると、今までのような心では往生はとても出来ないとわかって、今までの心をふり捨てて、ただ他力本願をたのみまいらずのを廻心というのである。もしも一切の事柄につきて、朝夕に廻心して、その上で往生がとげられるというならば、人間のいのちは出ずる息は入るをまたずというはかないものであるから、自分のしたことに対して未だ廻心もせず柔和にもならず、忍辱の心もおこらないうちに、いのちが終ったならば、弥陀の摂取不捨の誓願はなにもならぬこととなって、救われないではないか」と仰せられ、次に信心の行者の心持ちをうがってこう仰せられてある。

即ち「口先きでは願力をたのみ奉るといいながらも心の中では、いくら悪人を救済するという願力の不思議でも、やはり善いものを好み救うて下さるにちがいないというように、本願力に疑いをはさむようになり、従って専ら願力

の不思議を信ずる心がかけてあるのであるから、辺地に往生するということは、非常に残念至極なことである。信心が定まったら往生は弥陀如来が一切ひき受けて下さることであるから、自分でとかくとはかろうには及ばぬ。わるければ悪いにつけて、益々願力の不思議を喜んだならば自然の道理で、柔和忍辱の心も出てくるに相違ない。すべて何事につけても、往生については賢い思い、即ちとかくはかろう心をすてて、ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なることを思いだすがよろしい。そうすれば念仏も申される、これが自然である。自然とは自分ではからわないことである。これが即ち他力である。然るに自然とは何か別の意味があるかのように、物知り顔に自慢そうに云う人のあるのは不都合なことである」と。

かって私が監獄の囚人に教誨した時、一人の囚人がこういうことを云うたことがある。「今度ここを出ましたならば、早速大金を盗み出して、それを何処かに埋めておきます。そしてその刑をうけてしまって、さて放免された暁には、さきに埋めた金を利用して大いに国家のために尽します」と。その囚人はそれが大変によいことのように考えている。けれども私共もまたこの囚人と同じようなことを毎日やっているのであります。一方で悪いことをしては一方で慈善だなどというている。子供の顔をなぐっては撫でているのであります。人生には一つもよい処はないのである。みなことごとく罪悪であるが、この罪悪のあらん限り、如来はこれを憐みます御真実のために、この御真実に打ちまかせて、罪悪の重いものが善くなってでなく、救済の親心に感激して、人に対する面目や、外聞やをかえりみずに、ただ親の元に走る。ここに全く如来のめぐみに頭がさがって助けられるのである。ここに「我身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して出離の縁あることなし」という自覚が、如来の真実に徹底されて生ずるのであります。自分のことをかれこれと認めていたのがあやまりだったと気付くのが罪悪生死の身となるのである。

信仰そのものと、人生生活とがかけはなれてはならぬ。信仰そのままが、生活にあらわれねばならぬのでありますこれがいつも離れがちである。如来の真実を信ずるひとの人格は、たとえば友人に対しては、友情として現われねばならぬ。私はこう信ずる、信仰に入ったということは、たしかに自分の生活が変ったと思う。それまではつまらぬことが考えられ、むやみに人を疑ったのが、そんなことはなくなった。殆んど性格が変ってモルヒネ注射をうけたように如来の真実に全人格がマヒして何も感じなくなった。大のみこみに人が信ぜられるようになったというてもよろしい。商売しても、行きつまっても、如来のお慈悲があることだから、もはや何もうちまかせて、自分の最善と考えることをやるより仕方がないとなるのであります。

頻死の病人でも信仰に入ってからは、生命が助かっても死んでも、いずれにしてもかまわず仏にまかせてしまってどこどこまでも見すてて下さらぬ如来の御真実を喜ぶより外はなくなるのであります。信仰に入る前に色々と遺言をならべていたものも、入信後は一切言わなくなる。さればとて遺言の打ち消しもしない、取り消す必要すらなくなるのであります。信仰に入った人は決して遺言などはしない。遺族が守るか守らぬかも分りはしないので、お慈悲に夜があけると一切必要がないのであります。西郷隆盛が「欲のないものほど恐ろしいものはない」といったが、全くその通りで野心あり政策あるものはかえってそのために亡びる。信仰あるものは、如来の真実に打ちまかす故に捨て身になる。窮鼠も猫をはむ。この捨て身になることは信仰ある者に限るので、すて身ほど偉大な力のあるものはないのであります。軽業師が空中を走るように見えるのは針金があるためであります。信仰は仏の針金の上を走るのであるから捨て身になれる。ここに信仰の偉力が生ずる。

人間は名誉も金銭も欲しい、けれども思うようにはならぬ。今ここに賄賂を用いる一法がある、これが自分の成功の近道とわかっても、自分の信仰上いけないとなればいけないとはねつける。そのために人生的には劣敗する如きもそれでもやらないとなるのがすて身であります。かの日糖事件でもすて身の人が勝ち、悧巧にやった人が遂には劣敗したようであります。

如来の広大なる慈悲は信仰の偉力としてあらわれる。教行信証の正信偈のはじめにも「若し如来威神を加えたまわずばまさに何をもってか達せんとする。乞うらくは神力を加え給え」とあり、和讃には

天親菩薩のみことをも　鸞師ときのべたまわずば
他力広大威徳の　心行いかでかさとらまし
その他到るところに如来の威神力、加威力をとかせられてあるのであります。

（文責記者）

（大正六年八月、法蔵三一二号）

苦悩の救済

白井成允

釈尊は人生のありのままの相を「苦」という言葉であらわされました。私はこのごろだんだんこの御言葉の味わいを少しずつ知らせていただくようになりました。

自分の身の上についても、親しい友の身の上についても、敬う師の御身の上についても、老いたる者についても、稚い者についても、少しく近づいて眺めれば皆斉（ひとし）く「苦」の影のつきまつわらぬ者はありません。遠くから表から眺めると常に楽に充ち、笑声に溢れているような家庭についても、其中に入り親しむとやはり苦の影が何処にか存しているのを見出します。何も知らない稚児がすやすや眠っています、然し父は彼の身の上にやはり苦の影が襲わずにはいないのを知っています。其が人生のありのままの相です。

苦の影はいろいろの形を以てあらわれます。病となり貧となり災となり、賊となり讐となり敵となり、貪慾となり、瞋恚となり愚痴となり、驕慢となり弊悪となり懈怠となり、百態千様の形をとって私共を心の内から身の外から襲い寄ります。親とか子とか夫とか妻とか兄弟とか朋友とかいう、自分に最も親しき愛しき者が各互に苦の縁となります。児の病に侍る親の心は苦に充ちています、最も強く愛する者に苦が最も強く集ります。

「大無量寿経」を繙（ひもと）きますと、かかる苦の相がいと懇（ねんごろ）に示されてあります。読むたびに恐ろしくなります。江部氏の国語訳によって其の一節を記します——

「仏言わく、弥勒（みろく）よ、その第五の悪というのは、世の人々、放逸懶惰（らいだ）にして、善をなさず、身をおさめて、家業をかえりみないために、家族や親類が飢え凍えて困苦する。父母が意見をすれば目を瞋（いか）らし、言葉荒々しく口ごたえするさまは、あたかも敵同志のよりあいのようである。かような子なら、むしろ持たない方がいいだろうと思わせる。取るにも与えるにも節度がな

い。そのために多くの人々が迷惑をこうむる。恩にそむき、義に逆らって受けた恩義に報いようとの心掛けがない。貧困におちいっても、自分ではたらいて金儲けをすることができず、ただ我がためばかりを思って、無道にも他人のものを奪いとり、それを勝手にまき散らす。そうした悪事に慣れきって、他から奪いとった財物でぜいたくな暮しをし、酒にふけり美食をたしなんで、方図もなく飲み食いする。遊惰三昧にながれて、愚なくせにとかく出しゃばりたがり、いたるところで他と衝突する。人情を知らないで、強いて人を抑えつけようとし、人が善事をすれば、嫉みごころを起こし、義もなく礼もなく、反省の念や遠慮ごころは一向ない。しかも自から自分を正しい人間とおもっているのだから、諌めさとすわけにはいかない。親類縁者の生活状態などは更にこころに置かず、父母の恩をおもわず、師友の義をかんがえず、心に常に悪をおもい、口に常に悪を言い、身に常に悪を行って、曾て一度も善事をなしたことがないという有様である。もとより先哲や諸仏のおしえを信じない。道をおさめて迷をはなれ得ることを信じない。死後たましいが更に生れかわることを信じない。善きことをすれば善きむくいをえ、悪きことをすれば悪きむくいを得るということを信じない。こころに真の人を殺し衆僧の和合を破り、父母兄弟眷族（けんぞく）を害しようと思っている。されば親類縁者が、その人を憎みきらって、何うぞ死んでくれれば可いとおもう。かかる世の人々の心のうちは何れも同様で、第一彼等は何ものをも見究めることのできない愚ものでありながら、而も自分では一かどの智慧者だとおもっている。もちろん彼等に、何処から生れて来たか、死んで何処へ行くのか判るわけがない。不仁不順にして、天地の道理にかなわない彼等でありながら、しかもこの天地のあいだにおいて、希望をいだき、僥倖（ぎょうこう）をねがい、長生きがしたいとおもっている。然しながら死の時が来ずにはいない。憐みのこころをもって教えさとして、彼等に善をおもわしめようとし、生死善悪の道徳の自然にそなわっていることを説いて聞かせても、彼等はあえてそれを信じようとしない。彼等のこころは閉じ塞がっているために、どれほど熱心に話しても、会得ができず、何等の効果もないのである。

かくて彼等はさにこの世を終ろうとする時に、悔いと懼（おそ）れとにこもごも攻められる。つねづね善事をおこなわないでいて、いのちの終りぎわになって始めて後悔したところが、今さら何うすることも出来ないだろう。天地のあいだに、地獄・餓鬼・畜生・人間・天の五つの世界が、あきらかに区分されてあって、広きがうえに広く、深きがうえに深く、遥かにしてまた遥かである。善悪あい応

じ、禍福あい承くることは数の自然で、身みずから之にあたるべく、誰も代るものがない。罪のむくいはその行為に応じて自然に到来する。そこに加減や用捨をくわえる余地がない。されば善人は善をなして楽しみより楽しみに入り、明るみより明るみに入り、悪人は悪をおこなって苦しみより苦しみに入り、冥（くら）きより冥きに入る。仏を除いて誰かよくこの道理を知るものがあろう。この道理を教えしめすけれど、信じ用うるものは尠い。それがため生死は已まず、苦悪の世界が絶えない。かかる世の人々はつぶさに挙げて数えることができない。それゆえにおのずからなる三つの苦悪の世界の量りない悩みがある。そのうちに浮きつ沈みつして、世々劫をかさね、出ずる時がなく、迷を脱することができない。げに言うべからざる痛ましさである。」

かかる口語にくだかれると荘重端厳なる原文に比べて力が少からず乏しくなる感じがしますが、それにしても一句一句何という深い教えでしょう。ここには私共の現実がさながらに暴露されてあります。

肉体の上の苦は時として却って精神をすがすがしくしてくれることがあります。病気の時など其のために却って心が落着いて、ふだんの騒々しい生活から離れて孤独寂静を楽しむというような、うれしい気分になることがあります。然しそれも程度の問題です。四五日の間こそよけれ、十日半月と過ぎると心がいらだってきます。たよりない寂しさがだんだん湧いてきます。その間にいろいろの名利の慾念がはびこってきます。もう苦しくなります。ふだん「仮名の学につかれ」ている姿がいよいよ明らかになります。このとき自分の生活が根本に於いて「我執」に縛られたものであることを知ります。

親は子を愛することから幾多の苦を経ます。然しそれらの苦は決して厭わしきものではなく却ってうれしいものです、愛する子のためには甘んじて苦を受けます、苦を苦とは思いません。然し目蓮尊者の母君は子の愛の故に餓鬼道に堕ちたと言い伝えられてあります。まことにカントがキリストの隣人の愛の教を解したような考え方に従えば、子に対する愛は殆んど悉く「我執」からの盲動です。

我執の盲動が最も都合よくなめらかに行われるとき私共の心はよろこぶのです。子に於いてよろこび、妻に於いてよろこびます。よろこぶところ其処に我執は根強くかくれています。凡夫の起こす常楽我浄の考は、すべて転倒の見であると教えられたことはこうして知られます。真実の永久・福祉・自由・清浄の境は唯我執を解脱した者のみの住み得る世界です。我執の根の断たれざる者に「苦」は必然の世界です。

まことに「苦」を「集め」造りなすものは無明なる「我執」です。我執の故に私共は「おのずからなる三つの苦悪の世界の量りない悩み」のうちに「浮きつ沈みつして、世々劫をかさね、出ずる時がなく、迷いを脱することができない」のです。

「仏法には無我と仰せられ候。我と思うことはいささかもあるまじきことなり。」（御一代聞書八〇）

私は親鸞聖人の御生涯を偲びまつるごとに其の測るべからざる「無我」の御相に驚歎せずにはおられません。

浄土門の興廃がこの一挙にかかわるというような重大な法論の席にわが師友すべての念仏者を代表して出で、衆多の論難をあびせられながら、一言もいいひらきをせずに黙して退いて来られたことの如き。師弟ちりぢりに遠く流されながら、「抑又大師聖人もし流刑に処せられたまわずば我又配所におもむかんや、もしわれ配所に趣かずんば、何によってか辺鄙の群類を化せん、是なお師教の恩致なり」と慶ばれたもうたことの如き。己れを害しようとする者に「左右なく出であいたまい」て忽ち彼の心を柔和ならしめたまいし如き。更にまた「親鸞は弟子一人ももたず」と言い「父母孝養のためにとて念仏一ぺんにても申したること未だ候らわず」と言い、其他かかる御事と御語とは挙げ数えるいとまのないことであります。否、聖人の御生涯が、世にも知られず、史乗にも記されず、所謂歴史の上に有るか無きかさえ疑われたほどに迹も遺さざる、黙々として隠れたる九十年にて在したことこそ最もよく聖人の無我の御相を語っていることであります。

無我なる聖人の御相からは凡夫の転倒の見解が永久に離れているように見えます。結婚の生活さえも、其は恩師の御教に随順したものとして、太子の慈懐の実現として、夫と妻とが互に互を仏として相念ずる世界の面影の映写として、聖化されています。

然らば聖人には凡夫の我執が無かったのでありましょうか。曰く、「誠に知んぬ、悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証之証に近づくことを快（たの）しまず、恥ずべし傷む可し矣」と。此処に悲惨なる人間の苦悩があります。払えども拭えども如何ともし難い我執の煩悶があります。聖人もまた其の自性に於いて愛慾に泣き名利に惑いたる凡夫としてやはり苦の世界の住民であります。

かかる凡夫が、然し、かの無我の相に浄化されています。是れまことに不思議であります。

今の世には親鸞の「人間味」とかいうことがもてはやされています。其処には愛慾に迷い名利に惑う凡夫の姿が、又は情実にからまれて虚仮の世間に執着して動きのとれな

い凡夫の姿が、又はせいぜいかかる姿から逃れようとして泣き祈っている人間の姿が、なつかしまれています。然し、是れ私共が私共の我執に出ずる転倒の妄見に住しつつ、その私共と同じ姿なる親鸞を見て喜んでいるだけのことではないでしょうか。然らば此処にはわが聖人は在しまさないのです、私の救済もまた存しないのです。

私共にとって親鸞聖人のありがたいのは、聖人が私共と等しく迷界の凡夫であったからではありません。また、聖人が私共とは係りなき超越せる神性であったからではありません。ただ聖人が私共と等しく苦悩の凡夫でありつつ其儘にして無我無碍の往生人となりたもうたからであります。凡夫が仏となる真理を御身に証せられて而して私共に其道を開かれたからであります。私共をして私共の久遠の迷界の故里から解脱せしめ、かの浄土に往生せしめたまわる道を示したもうたからであります。「苦」の「滅」はこの「道」によってのみ致されます。

然らば苦界の凡夫、如何にして悟界の仏たるか、是れ不思議であります。曰く

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんと思召したちける本願のかたじけなさよ」

と。南無阿弥陀仏。　『信仰と反省』（二・四・十九）

一茶の句に聞く

あばら家や　その身そのまま明けの春

源信僧都の法語に「妄念は凡夫の自体なり、妄念の外に別に心はなきなり。妄念のうちより申し出した る念仏は濁りにしまぬ蓮の如くにして決定往生うたがいあるべからず」とあるに通う信味である。そこに照らされて慚愧あり、そのまま感謝がある。

春立や　愚の上にまた愚にかへる

闇室に燈火がつくと、明るさを喜ぶが、やがて部屋の乱雑と塵埃に驚かされる。念仏して一年一年、お手引が重なるにつれて、わが底なしの愚が事毎に知らされる。

初夢に　古郷を見て涙かな

わが古里は煩悩林。今も身には煩悩具足。その相の初夢に驚いて唯涙あらた。

よろこびも中ぐらいなり　おらが春

老いて家を持った一茶、子が生れると次々と夭折、恵まれぬ生涯ながら念仏があり句があった。

慈母の念力（三）

——亡母の三十三回忌を迎えて——

高千穂徹乗

信心とは自分のちからで何かをつかむのではなくて、大きなちからに、すべてをまかせきることであります。ゆえにすなおに、まかせきるためには、先ず自分を空（むな）しくし、自己をうつろにしなければなりませぬ。私たちは、はからいの殻（から）をかたくとざして、仏さまの慈悲を受け入れないようにしております。

信心とは自分のはからいによって、私はかように信じますと、りきむことではなくて、仏さまの大悲によって、私のはからいが打ちくだかれ、仏さまの真実まごころが、私の心にいたりとどいたことでありますから、一分のくらさもない明らかな智慧であります。

このように仏さまの願力を信ずるよろこび、正しい教法（おしえ）を聞くたのしみ、人と社会とに奉仕するたしなみ、これらはこの世における最もすぐれたよろこびであり、たのしみであります。どんな逆境にあっても、私たちには、これらの大きなよろこびが残されています。それでこのよろこびを見わすれたら、私たちは、いちばん大事なものを取りおとしたことになるのであります。私たちが自分のちからでかきあつめたものは、すべて無価値であり、無力であります。ただ仏さまよりあたえられたお念仏だけが最後まで残って、私のちからとなり、私をみちびく光となるのであります。

それでこの信はよろこびであると共に、信は苦難をふみつけて、強く生きぬくちからでもあります。

天正十八年三月、豊臣秀吉は大軍をひきいて小田原城を攻略しましたが、部下の堀尾家の一族も動員されて出陣いたしました。そのとき十八歳の若武者堀尾金助は、この軍勢に加わり、六月に見事な討死をしました。金助の母は、かわいい一人息子の戦死をきいて、悲しみのどんぞこにしずみましたが、真宗西照寺の僧淳誓の教化をうけて、仏さ

まのお慈悲をいただき、三十年のあいだ、悲しい時も苦しい時も、お念仏ひとつに心をなぐさめ、心をはげまして、みちたりた月日をおくりました。いよいよ老いさきみぢかいことを知った母親は、なにかひとさまのためになることを残しておきたいと願って、金助の三十三回忌の法要供養に、神宮参道の裁断橋（さいだんばし）をかけかえたのであります。そしてこの橋をわたる人は、ひとこえの念仏をよろこんでもらいたいと念じて、橋のらんかんの擬宝珠（ぎほうしゅ）に、思いのありだけを書いて彫りつけたのであります。この橋は現在は旧東海道の改修などで、路側の姥堂（うばどう）地内に移され、旧時の三分の一ほどに縮小されていますが、そのときの擬宝珠だけは残り保存されているのであります。

○

私は長いあいだ学問の道をあるいてきましたので、試験をうけたり、試験を行ったりしましたが今でもときどき試験の夢を見ることがあります。しかし机の上の試験は、少し勉強すれば、及第点をとることができますが、人生に於ける現実の問題について立派な答案を書くことは、たやすいわざではありません。私たちは一生のうちに一度や二度はギリギリの難題につきあたって、即座に答案を書かねばならぬ時があります。他人にほめてもらうためではなく、良い賞品をいただくためでもなく、みずからをかえりみて、腹のそこからニッコリ笑えるような答案を、書きのこしておくことが、せっかくこの世に生れた所詮ではないでしょうか。

私たちの一生には、笑う日もあれば泣く日もあります。しかし泣いても笑っても、大波小波をのりこえ、のりきり泳ぎぬかねばなりません。私たちにとって安らかに死につくことも困難なことですが、死ぬほどつらいことを辛抱して、強く正しく生きぬくことは、更にむつかしいことであります。私たちは最悪の危機に直面した時に、七度ころんでも八度目には起きあがるだけの活力素をもっていることが肝要であります。天幕を広く張る時はその綱を結ぶ杭（くい）を、深く打ちこむことを忘れてはならぬのであります。

○

ちかごろ人気のある相撲の世界で、すぐれた力士となるには、体と技と心、この三つがそなわらねばならぬといわれます。からだとわざを強くすると共に、心を練（ね）ることが肝要で、これがいちばんむつかしいことのようです。将棋の名人である升田さんが「いつでも勝敗というものは自分にある、自分の心にある。自分の相手は自分以外にない、升田の敵は升田だと毎日自分に云いきかせている」と語っています。自分の心に勝つことが、勝敗のわかれめであります。私たちの日常の業務や生活においても、すべて「心」のはたらきが基本となるようであります。ちかごろは、このような自分の心とのたたかいにおいて、経験の少いことが、その人の精神の空白となって、いろいろな障害をつくっているのであります。

このごろは山に登る人が多くなりましたが、山にのぼる前には、自分の体力をつくり、道具をととのえ、技術をみがくことが必要でありますが、なによりも山にのぼる「心」のありかたが大切であることをわすれてはなりません。登山のベテランである小島六郎さんは次のように登山者達をいましめております。

登山者はつねに、山という大自然のまえに、自分の小さな自我を捨てて、山を畏（おそ）れながら。そのふところに入ってゆく「心」のゆとりを持たなくてはならない。登山の技術は、その「ゆとりのある心」のなかから生れてくるものが、ほんとうなのだ。

自分の体力や技術にとらわれ、自我だけで大自然にぶちあたってゆくと、いつかは山や海に思い知らされる時がくるのであります。小島さんのことばは、ただ山にのぼる人たちに対する忠告ではなくて、私たちの日常生活について、その心がまえを示しているようであります。

今日の社会は、いろいろな矛盾（むじゅん）や不安の多い環境でありまして、私たちはこれらの社会的矛盾や生活不安と、たたかいながら生きてゆかねばなりませんので、少しでも自分の生活をかえりみるならば、かならず大きな壁に、つきあたらざるをえないのであります。そしてみんながわびしい自分のすがたと向きあって、深いさびしさを、心のそこに感ずるのであります。何ものによってもごまかせない、深いわびしさと大きな悩みをもつ私たちが人間本来のしあわせを求め、人生いかに生くべきかについて、思いをめぐらすところに、宗教の門はひらかれているのであります。

仏教には「大死一番、（たいしいちばん）大活現成（だいかつげんじょう）」ということばがあります。私は我執をすてて、死んで死にきり、生きて生きて生きぬくところに、大きく新しい世界が活現することを示したものであります。かくて私たちは、大空を流れゆく白雲のように、ゆたかな心で、たのしく生きぬくと共に、安らかに死んでゆける安住の境地が、ひらかれてくるのであって今日の一日が、永遠につながる一日として、深い意義をもってくるのであります。

○

私が声帯ガンの治療のために手術をうけて、声を失って

から二十七年六ケ月、近年はまた眼をいためて右眼失明、まことに不自由なことですが「持ちきれない、荷物の重さ、まえうしろ」という山頭火（さんとうか）さんの句のように、私は苦難の重荷を背に負うて、どうやら今日まで生きながらえてきました。しかしそのあいだに唯ひとつ、私の身にかけて、知らされましたことは「御恩」ということであります。私の七十年の生活は、まったく御恩のなかのひぐらしでありました。私は今日まで生きながらえたおかげで、いよいよ強く深く、広大な御恩に生かされて生きていることを知らされました。余命いくばくもないことを思うにつけても、私は分に応じた御恩報謝のつとめに、はげまねばならぬと思って、のこりのいのちを燃やしつづけております。

山川の　あらき流れの　ふちにして
いのち静けく　咲く花のあり

わかれても　おなじみおやの　慈悲のなか
御名となえれば　呼びつ呼ばれつ

母を憶う

ゲエテ

うつし世にいと美しきもの、そは
子を抱く母のほほえみ。
うつし世にいと尊きすがた、そは
子等を前に端坐する母の面影。

行基菩薩

三年の母の喪をへて
ほろほろと鳴く山鳥の声きけば
父かとぞおもう　母かとぞおもう

松尾芭蕉翁

父母の　しきりに恋ひし　雉子の声
ふるさとや臍（ほぞ）の緒に泣く　年の暮

姥捨山の歌

奥山に枝折り〳〵るは誰がためぞ
親の身捨ててかえる子のため

暁烏敏

一億に　一億の母はあれど　わが母にまさる母なし

念仏詩抄

浄土眞宗

三州　田原の
おそのさん曰く
〃なにもかも
向うからじゃ
向うからじゃと
言うているのは
ちがいますゲナ
言うても言わいでも
向うからじゃゲナ〃

浄土真宗
向うから
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
（編者添付）

木村無相

西有穆山老師をたずねた雲水が、「天地宇宙と我とは一体と思う」と云うと。老師言下に「思うだけわるい」と答えられた。

今

和上おおせに
〃ナムアミダブツ——
今　呼んでくださるる
ナムアミダブツ——
又呼んでくださるる〃

※和上＝禿顕誠師

ナムアミダブツは
今の呼び声
今堕つる身に
今の呼び声
ああ
堕つるも　今

お助けも　今
今　今　今

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

今　日

毎日　毎日
煩悩が新らしい

毎日　毎日
お呼声が新らしい

毎日　毎日
今日　が新らしい

今日一日の
わたしの人生よ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ひとえに

歎異抄第二章に

〃詮ずるところ
愚身の信心におきては
かくのごとし
この上は念仏をとりて
信じたてまつらんとも
またすてんとも
面々のおんはからいなり〃
と——

めんめんの
ハカライでは
信じられぬ
ひとえに弥陀の
オンハカライ——

ナムマンダブツ
ナムマンダブツ
ナムマンダブツ
ナムマンダブツ

み名に聞く

み名に聞く
み名に聞く

〃たすけんと
おぼしめしたちける
本願〃を
み名に聞く
み名に聞く

〃されば
そくばくの業を
もちける身にて
ありけるを
たすけんと
おぼしめしたちける
本願のかたじけなさよ〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

わたしはこのまま

わたしの後生は
お引受け
ナムアミダブツさまが
お引受け
わたしの後生は

ミダに聞け
わたしはこのまま
生きるだけ
わたしはこのまま
死ぬるだけ

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

唯　称　仏

ナニをするにも
ナニをおもうにも
名利はなれて
できないわたし
名利は一定
すみかぞかし

〃極重悪人唯称仏〃

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

いのち尊し

花田正夫

親の生存中は軽く考えているが、亡くなったあと、嬉しいにつけ、悲しいにつけ親のありがたさが段々と身にしむようになる。すべてものの真価は失ってのちに知れはじめるものである。

いのちの尊さも、本当のところは自分の死後に気づかされるものであろうが、それを実験するわけにいかぬ、そこで生と死が表裏して存在するのであるから、生の中にある死、生死が併存することを先ず省みよう。このことは当然のことであるが、私共の実際の生活は、生と死をひきはなして、何時も死なぬ積りで遠くにおいている。

私が医学生の時、友人が死を前にして「僕は医師になって病人を護ろうと願っていたのに、自分が駄目になるとは知らなかった」と嗚咽した声が今も耳の底に残っている。

明治の高徳、行誠上人は「それは死なぬ人の云うこと」と、弟子達が自分を忘れた浮いた論議をする時、常にきびしくいましめられたと聞く。又清沢満之師は「吾人は生死を併有するものなり、生のみが我にあらず、死もまた我なり」と述べていられるが、これは生の中に死を受容されている人々の心境である。

私は三十五の秋、肺浸潤で二年余り養生して何とかして速に治したいにかかりはてた。次いで敗戦後の四十六の夏、過労から心筋障害となり狭心症発作、一病息災を願って蓬戸不出の生活を始めた。更に六十五の春、突然に多量の血尿、膀胱腫瘍で手当をうけ続けた。このように度々病気して、その重い時は駄目かなあと思うが、一寸調子がよいと、喉元すぎれば熱さを忘れて、まあ、これでよかったとあぐらをかいてしまう。結局、私は身びいきな心に支配されて、自分に都合の悪い、老いとか死とかは極力拒否し続けるのである。その有様は眼の錯覚と同様である、山の端を出ようとする月は大きく見え、大空にのぼると小さく見える、然し月が遠くなったり小さくなったりはしないことは百も承知しておりながら、実際そのようにしか見えないのである。これと違って眼の近視や遠視は眼鏡で調節が出来るが、錯覚は万人が持っていて、眼鏡や薬ではどうにもならない。そのように身びいきな心の錯覚があって、自分に都合の悪いことは拒否して、ものを正しく見ることが出来ないのである。石川啄木も、

悲しきは飽くなき利己の一念を
もてあましたる男にありけり

と、そのことを事毎に痛切に感じたのであろう。こうした身勝手な考えからどうしても出られない私共であるが、老いと死の無常の風は一切の人々の上に容赦なく襲うて来る。だから凡情に終始する私共には、或日突然に死が前を塞ぐのである。そうなればかねての覚悟はどこへやら、周章狼狽して藁にでもしがみつくが、やがて万策つきて力なくして、万斛の恨みをのこしておわるのがそのさだめである。

こうした私共に、それを御自身の体験の上から、全くそれより外ないよ、その通りだと仰言って、同座して下さり、この私共のために、生死を超脱された覚者にましますと仏陀が、大慈大悲の救いの御手をさしのべて下さっていることを伝えて頂けるお方がましますのである。私にとって、それは愚禿と名告られる親鸞聖人であった。

ヘレンケラー女史がいつも「盲で聾で唖の三重苦の私に外からの教師は無用である、なくってはならぬのは、今一人の私である」と、家庭教師のサリバン女史を讃えている。外からの教師とは、ああしなさい、こうしなさいとよいことを教えてくれるが、その通りになれぬと、仕方がないと手を放す人である、今一人の私とは、ヘレンさん目が見えないのか、じゃあ私が貴女の眼になりましょう、耳が聞こえないのか、じゃあ私が耳になりましょうと限りなく手をさしのべて下さる人である。さて身びいきな心があって自身の老いとか死とか、自分が愚であり悪であるとはどうしても思えぬ、盲で聾で唖の私に、今一人の私となって下さる方が親鸞聖人であった。

その聖人が我が御身にうけられている仏の大慈悲心に私の全体がおさめられて、そのたのもしさから「死もまた我なり」と思わずひとりごとを言った。一番いやな、一切の人間のいとなみが無力になる死を、逃げようとしたり、打ち勝とうとしたり、あきらめようとしている間は、どうにもならなかった死を、受容して、それに随順する心になった時、生死の大海を照らす大光明の世界への道がひらけたのである。しかも死に様の如何は身にもつ業報にまかせきれるたのもしさ、これは別に人様に誇ることではないが、ひとり居て内に充実するほのぼのとしたよろこびであって、自分の着た衣服の如何でなしに、人に生れた素裸のな

りのよろこびである。源信僧都の「それ人間に生まれたること大きなるよろこびなり。……故に本願にあうことをよろこぶべし」との横川の法語も、私共と同喜して下さる実語といただいている。

それにしても、人と生まれてよき師、今一人の私になって下さるお方にお遭い出来たことは、迷い児が親に見出されたと等しいよろこびである。ここから親と子が手に手を執り合った賑やかな旅がはじまり、順縁逆縁を問わず、人と生れたいのちの尊さ、一日一日のありがたさも味いはじめるのである、長崎の篤信の国手、高原憲先生の

何事もわれ一人のためなりき、今日一日のいのち尊しの法味は、念仏者一人一人の歓びの声であろう。

○

次に生甲斐の問題であるが、これを見失うと生ける屍となってしまう。福祉事業の世界第一といわれるスェーデンで老人の自殺率が高いのも、外の設備とか趣味、娯楽の有無の問題でなく、内に生き甲斐を失ったためである。

さて、何が本当の生き甲斐であろうか。私ははじめに、本能のままに外物を頼り、名誉や財産や愛情を求めたが、底のない槽にどんなに注いでも水が溜らぬように、無限の欲望の身に、得られるものには限度があるから、喉元過ぎる時だけの喜びであとは不平と不満と焦慮の連続であった。

次に眼を内に向けて、自分自身を立派にして、自分の力で理想の家を建てようとして、手当り次第によい教えをあさり、真と善と美を求めたが、そこには自身の愚と悪と醜が見出されるばかりであった。恰も肉眼では綺麗に見える掌も顕微鏡で見れば無数の細菌や汚物が知れるように、行けば行くほど自己の醜悪さと愚劣さに行き詰った。

ゲェテは、有名な詩、ファーストの中に

「すべて善良なる人は、よくなりたいと願う、それは不滅な願いであるが、無力である」

と云っている。翼を失った小鳥が大空に憧れて、地上を何時までも走り廻るように、人々は絶対なる善を求め、それが得られぬと満足して安心できないが、相対の力しかない身の悲しさに、何時までも得られない歎きに沈まねばならぬのである。

さて西欧的自覚は自己に価値を見出すことであるが、東洋的自覚の特徴は、自己の無価値にめざめて、超価値の絶対界に浮かぶにあると教えられたけれど、これを自分で実践しょうとすれば実に至難である。第一に、稔った稲の穂は頭を下げるが、しいなは、頭を上げる。慢心のかたまりの私共は、無価値なのにそれを素直に認め得ないで、今は駄目でもいつかは立派になれると未来の幻影は捨てられな

い。第二に、相対分別の智慧しかない私共は、有無は解るが、有無を超えた絶対平等の境界はこころも言葉も及ばない。あえてそれを求めても、長い棒を振り廻して空に輝く星を落さうとする児戯に似て、不可能である。

二千五百余年の仏教の歴史において、その道を真剣に進まれた人達は、人間の持つ力の限界に立って、百尺竿頭一歩を進めねばならぬのである。良寛師の

四十年前行脚（あんぎゃ）の日
辛苦虎を書いて猫も成らず
如今嶮崖手を撒（はな）って看る
只是れ舊時の栄蔵子　（※良寛師の俗名栄蔵）

とは、師が玉島の円通寺で十年余の修行学道の末、三十三歳の時ついに悟境に達し、国仙和尚から印可を受けた時を回顧された詩である。虎を画こうとして辛苦して遂に猫にも似ないという行き詰りから大死底の人として回生された心境である。

法然聖人は、修行学道三十五年の四十三歳の時、

「法は深妙なりと雖も我が機すべて及び難し、経典を披覧するにその智最愚なり。行法を修習するにその心ひるがえってくらし」

と、大暗黒、大疑団に遭遇されたのである。幸に源信僧都の往生要集に暗示せられて、中国の善導大師の観経の四帖の疏をひもとかれて、そこに選択本願の念仏こそ凡夫往生の白道と教えられ

「余が如き下機の行法は、阿弥陀仏法蔵因位の昔、かねて定めおかるるをや」

と、直ちに仏願に随順せられて念仏者となられたのであった。あたかも胃腸の衰弱した重病人は、やわらかなお粥だけが喉を通るように、十悪愚痴の身にはお慈悲のお念仏だけが力でありたのみであると、そこに生死をはなれ得ぬ身に如来からの救いの綱を頂かれたのであった。

親鸞聖人は二十九歳、叡山の二十年の修行も空しく

「いずれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

と、ついに断念されて叡山を下り、幸にも恩師法然聖人を吉水にたずね得て、

「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」

の仰せを、親鸞一人がためといただかれ、念仏無碍の大信海に浮かばれて。

「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なき故に、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきが故に」

の絶対価値の世界がひらかれたのでる。

以上の諸師は、相対虚仮な自分の力では、絶対真実の生き甲斐は不可得であると、その限界に立たれて、如来から廻施せられる無碍難思の光明を唯一の生き甲斐とせられたのである。

さて、後に生れた者の幸せには、すでにこの大道を身をもって信証された上に、大いなる燈火として高く法燈をかかげて下さっていることのありがたさである。その光明は老少善悪の人をへだてず、貴賤智愚の人をえらばず、一味平等に一切人を照護して下さる徳光である。

月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人のこころにぞすむ

と法然聖人は一切人に公開された大道をたたえられ、伝教大師は、

鷲の山高根にのみと思ひしにわが立つ袖（そま）に有明の月

と、御自身にうけてよろこばれているし、西行法師は

人も見ぬよしなき山の末だにも澄むらん月の影をこそおもえ

と、名もなき身にもおへだてのない仏光を随喜されている。近くは、頼山陽を一喝して、心を転ぜしめた易行院法海師は

明らけき光を四方のかぎりにて月のうちなる武蔵野の原

と、広大無辺の仏徳に自身の全体がおさめられていることをたたえ、更に

武蔵野のチリチリ草の露だにも身をほそめてぞ月は入りぬる

と、摂取不捨の慈光あまねく、微細な煩悩のすみずみまでも入り満ちて下さることに慶喜されている。

私はここに、長島愛生園で亡くなった、明石海人氏の詩を思い浮かべる。

『癩』

十年前、隣人が私の生存をにくんだ
五年前、はらからが
今では、自分自身が

のこるは唯一人の母親だが
涙ながらに生きていよという……

とある。海人さんは、一介のサラリーマンであったが、発病以来、ありとあらゆる治療やら祈祷もしたが、その甲斐もなく、段々病勢がすすむにつれて、明石の療養所に入った。それからは、唯一のたのしみを絵筆に托して絵画の道にすすんでいった。然し病菌が視神経を犯して遂に失明したので、地上のたのしみはすべて奪われ、自殺をしきりにはかった。その後愛生園に入ったのちも幸に療友が見ま

もってくれたので自殺も出来なかった。こうしたドン底の生活にあった時、母のいのちのかかった悲涙にふれたのである。

爾来、自分には生きる希望もないが、この身を念じ続け一日生き延びると一日喜ぶ母があったと、気づかされて、これからは、病醜の身にそそがれる母の悲願をともしびとして生きようと、心機が一転したのである。すると、目は見えないが耳があった、松風の音も、小鳥のさえずりの声も聞こえる、絵は描けないが、詩があった、俳句も和歌もあった、とよろこび〳〵最後の日まで、一日一日を惜しみながら生涯を終ったのである。

私はこの海人氏の詩をいつも心に刻んで、そこに、自分では生き甲斐も見出し得ない、むしろ　いのちながくして恥多き私であるが、この愚悪の身にそそがれる弥陀仏の悲願の御なみだを仰いで、それ一つに生かされる道をおしえられる。

生かされて　生くばかりなりみほとけの　ふかき誓のあるにまかせて

とは、心筋障害になって、一切の仕事も出来なくなり、蓬戸不出の療養をすすめられた時の最初の腰折であるが、今もそのようにして生かされている。生きて生き甲斐のない身が、弥陀仏のおまこと一つに支えられて生ける日をつくし得るとは、何というありがたいことであろうか。

一蓮院秀存師語録

○

或人云く。どうも私は吾身のわるきいたずらものなりと思いつまりませぬ、と。

答えて云く。いたずらものがいたずらものとおもいつまらぬなれば、それでいよいよおもいつまるなり。いたずらものでありながら、それがいたずらものと思いつめられぬようないたずらものと思いつむべし。親鸞聖人は、内は愚にして外は賢なりと仰言って、愚者の故に賢こぶることしか出来ぬ身であると仰言っている、愚者が愚者と思えぬ愚者である。

○

在家には信をうる人多く、出家には少なし。その故は、わが商売やめて、わが身がたすかりたいばかりに聞くゆえに信をうるなり。

出家は、聞きてそれをわが商売のためにするなり、いわゆる商売片手に聞法するゆえに信を得られぬなり。

○

あほになれ　あほにならずば此度の　浄土参りはあやうかりけり
あほにさえ　なること知らぬこの身にて　浄土参りはうれしかりけり

慈光　第二十八巻　第一号　昭和五十一年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

あとがき

年頭、御名の中に賀辞を申上げます。お蔭様で慈光誌も二十八巻となり、先生方の護念と皆様方の念持力に支えられてまいりましたことを改めて御礼申上げます。

三十年近い年月、蓬戸不出の閑居静養を続けます私に与えられた、唯一つの道として小冊子の発行を喜んで続けさせて頂きました、これからも生ける日のしるしとして祖意を拝し、仏恩を仰ぎながら辿らせて頂きますが何卒この上ともに御叱声を蒙りますようお願い申上げます。

○

一月は法然上人の御忌月にあたりますので、八十御往生の近い時、勢観房に与えられました「一枚起請文」、と親鸞聖人が、一器から一器にうつすように、恩師の玄意をそのまんま御身に受けられた「歎異抄」二章を巻頭に掲げました。

「信仰の偉力」は、かって近角先生の講話を速記して発表した法蔵誌から頂きました。とかく他力信心が無力と間違われることの多いにつけ、先生が絶対他力の顕現をきわだってお話し下さったものであります。

「苦悩の救済」は白井先生の「信仰と反省」の旧著から転載させていただきました。ことに日本の現在、経済に政治に外交に、更に全世界の暗雲を知らされるにつけ、そうした時なればこそ、救済の道を求めるや切であります。

「慈母の念力」の高千穂師の原稿は七十六歳の無声の御身を慈母の影前にぬかづかれて誌されたものであります。私共は親の身になれませぬが、親はつねに子の身になりきって下さるので、その大いなまこと心に動かされて自然に親のふところに帰らされるのであります。誦経はもとより一声のお念仏をも称えられない身をどんなには淋しくそして悲しく思われていますことか。しかしその逆境にあっていよいよ仏恩の深重なほどを渇仰されているのであります。「障り多きに徳多し」の祖訓を身をもって示されました。「念仏詩抄」の木村さんも二月には七十二歳、冬籠りの内に越年されました。念仏詩を読んで下さる人々を拝んでいられることでありましょう。

高千穂徹乗師　（西本願寺観学）

十二月二十四日、脳卒中のため熊本市京町二丁目、仏厳寺、自坊で逝去、七十六才。一月八日熊本市民会館で本葬、喪主は長男正史氏。慈光誌上に慧星のように徳光を放たれ、お慈育を渇望しておりましたのに、足早やに浄土へ。

謹んで哀悼申上げます。

▽御案内△

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半、一道会例会。
但し第三日曜は坐談会を主といたします
地下鉄、新瑞橋下車、市バス新効通り一丁目下車。名鉄、呼続下車。

○毎月二十四日、午前午後、教西寺法話会。
昭和区小桜町。
市バス、北山下車。御器所通り下車。

定価　半年　五〇〇円（送共）
一年　一〇〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区瓢上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄
発行所　名古屋市南区瓢上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七